

<和歌の課題>

「一筋に射るてふ弦のひびきにて消えぬる身をもよびさましつつ」

(意味～一筋に射るといふ弦のひびきのような藩主のお言葉によって大島蟄居の私の心も再びよびさまされた思いがする)

吾年垂四十  
南嶼釘門中  
夜坐嚴寒苦  
星回歲律窮  
青松埋暴雪  
清竹偃狂風  
明日東帝迎  
唯應獻至公

吾れ年四十に垂んとす  
南嶼釘門の中  
夜坐嚴寒苦しく  
星回つて歲律窮まる  
青松暴雪に埋もれ  
清竹狂風に偃す  
明日東帝を迎ふ  
唯應に至公を獻ずべし

六三 武村ト居作  
ト居勿道傲三遷  
蘇子不希兒子賢  
市利朝名非我志  
千金拋去買林泉

武村ト居作(武村に居をさだめて作る)  
ト居道う勿れ三遷に傲うと  
蘇子は希わざりき兒子の賢  
市利朝名は我が志に非ず  
千金拋ち去つて林泉を買ふ

一九二 茅屋  
茅屋風微暖意生  
農夫擔耜試春耕  
麥苗蒼色侵霜秀  
礪水滯流觸石清  
日日遊田忘熱宦  
晨昏盥浴養幽情  
誰知暗結瀛洲夢  
夢覺早梅香玉英

茅屋の風微に暖意生じ  
農夫耜を担いて春耕を試む  
麥苗蒼色にして霜を侵して秀で  
礪水滯流し石に觸れて清し  
日々遊田して熱宦を忘れ  
晨昏盥浴して幽情を養う  
誰か知らむ暗に結ぶ瀛洲の夢  
夢覚むれば早梅玉英香る